

加賀検定

第6回 加賀ふるさと検定試験問題

上級 (全60問)

2018年 12月16日

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会

各問題に対して、それぞれ①～④までの選択肢の中に正解が1つあります。解答用紙に、正解と考える番号を1つだけ○で囲って下さい。(黒色のエンピツもしくはボールペンを使用のこと)

- 1 郷土料理の一つである「ズイキの酢の物」は、() とも呼ばれ、食物繊維が豊富であり、便秘に効果的だといわれている。
- ①スベ ②スコ ③コト ④キト
- 2 加賀の農家には() と呼ばれる物置が屋根裏にあり、燃料などを保存した。
- ①座敷 ②納戸 ③つし ④納屋
- 3 天然記念物の鹿島の森は、石川県に所属し、アカテガニや() などの珍しい動物が生息している。
- ①ノミハマグリ ②ツルガマイマイ ③ヤマトシジミ ④カバサクラガイ
- 4 もともと食用として外国から入り、育てられていた() は、時代の変化により野生動物になっている。
- ①トノサマガエル ②アカガエル ③ウシガエル ④ヒキガエル
- 5 東谷地区に所属する集落で、大聖寺川上流にあるのは() 町である。
- ①杉水 ②大土 ③今立 ④真砂
- 6 加賀市の() 町では、およそ 1000 万年前より新しい火山灰が固まってできた加佐ノ岬砂岩層の砂岩が多く産出され、主に土手の内張り石積みや建築土台等に使われた。
- ①深田 ②勅使 ③黒瀬 ④南郷
- 7 氷河期が終わった今から一万年前、() に対馬海流が流れ込むようになり、その結果、日本列島の西側海岸は雪が多量に降るようになった。
- ①日本海 ②東シナ海 ③オホーツク海 ④南シナ海

8 片野鴨池など、加賀市の湖沼には（ ）が生えている。これらは川から海に流出し、砂浜に打ち上げられる。

- ①ヒメビシ ②れんこん ③水蓮 ④花菖蒲

9 江戸時代はとめ山となり、人々の入山が規制されていた錦城山は、自然の木々や草が生い茂り、（ ）などのねぐらとなっており、糞害が著しい。

- ①鴨 ②サギ ③鷹 ④キジ

10 もと大聖寺藩士（ ）は、旧名を一色一之助といい、維新後、米国で万国博覧会を視察するなど新知見を得て、九谷焼の振興や鉛筆会社を興すなど、殖産興業に務めた。

- ①西出 大三 ②下口 宗美 ③飛鳥井 清 ④畑 久治

11 橋立町出身の哲学者で京都帝大の教授を務めた（ ）は、教育哲学の体系化を行ない、特に長野県の信濃教育会では高く評価された。

- ①木村 有香 ②関 秀華 ③松岡 信 ④木村 素衛

12 大聖寺の機業家で錦城物産(株)の創業者（ ）は、羽二重や縮緬ちりめんなどの製織法を改良し、当時、綿布におされていた大聖寺絹の発展に貢献した。

- ①篠原 藤平 ②山田 長太 ③清水 孝平 ④柿沢 理平

13 塩屋浦の北前船主（ ）は、西栄寺の創建・再建に尽力し、また、大火の際、多くの井戸を掘ったり、飢饉のときは村民に米や粥を振る舞うなどして人々から敬まわれた。

- ①西野 小左衛門 ②浜中 八三郎 ③新後 長三郎 ④亀谷 万吉

14 瀬越の北前船主（ ）は、明治に入り、いち早く汽船を導入し、九州で鉱山経営もおこなうなどして事業を拡大し、大きな利益をあげた。

- ①大家 七平 ②廣海 二三郎 ③久保 彦兵衛 ④西出 孫左衛門

15 熊本市出身の（ ）は、起業家山田長太の知遇を得て大聖寺に在住し、昭和初年に、「絹業週報」、「聖域公論」等の新聞を発刊したり、『大聖寺藩史』などの郷土本を出版した。

- ①森本 仁平 ②広田 百豊 ③溝口 秀勝 ④宮本 謙吾

16 縄文時代早期の柴山水底貝塚からは、県内最古の人骨や関西の影響を受けた（ ）が多数出土している。

- ①加曾利式土器 ② 星田式土器 ③ 大川式土器 ④ 北白川式土器

17 藤の木遺跡からは、県内最多の縄文時代中期の土器が発見。北陸特有の（ ）・上山田式土器・大杉谷式土器のほか、東海・近畿・関東系土器も有り、東西文化の接点であったことを示している。

- ①遠賀川式土器 ② 長原式土器 ③ 古府式土器 ④ 田戸式土器

18 上河崎地内から、弥生時代中期の（ ）が出土しており、大聖寺川流域でも稲作が行われていたことを物語っている。

- ①小松式土器 ② 板付式土器 ③ 成川式土器 ④ 円乗院式土器

19 「北陸の登呂遺跡」とも称される猫橋遺跡からは多数の遺物とともに（ ）が確認されており、稲作文化の発展とともに、強力な指導者が出現し階級社会への方向へ進んでいたことを示している。

- ①高床式住居 ② 大型竪穴式住居 ③ 銅鏡 ④ 方形周溝墓

20 富塚丸山古墳は、狐山古墳に続く豪族の墳墓と推定され、現在は直系70m近くの規模だが、もし前方後円墳ならば、全長（ ）以上で、手取川以南のこの時期では最大級の古墳といわれ、南加賀全体に君臨した権力者の墓だった可能性がある。

- ① 80m ② 120m ③ 160m ④ 200m

21 寛治5年（1091）、加賀守（ ）が加賀国府から帰京に際し、淡津泊を中継点として敦賀津まで向かったと日記に記録していることから、当時の貴族層は京都と加賀国の往来に船運を利用していたのが分かる。

- ① ふじわらのいえみち藤原家通 ② たかしなのためあき高階為章 ③ みなもとのまさかね源雅兼 ④ ふじわらのためふさ藤原為房

22 元弘3年（1333）、後醍醐天皇の倒幕運動に足利高氏が加担すると、加賀国福田荘 すがなみごうそうりょうじとう菅浪郷惣領地頭兼 すごうしゃかんぬし菅生社神主（ ）が能美郡国人2人と共に足利高氏に参陣した。

- ① たてべよりはる建部頼春 ② やわたなおなり八幡尚成 ③ かのうよりひろ狩野頼広 ④ かのうただいえ狩野忠家

23 中世加賀国の北野天満宮領は7ヶ所、うち江沼郡は福田荘・山代荘本郷・富墓荘の3ヶ所と集中していた。そのうち富墓荘は、室町時代中期には宮寺領頃は名目だけで、地元の武士に侵害され、わずかに菅原道真の後裔の（ ）が権益の一部を保有するものとなっていた。

- ①大江家 ②菅原家 ③高辻家 ④徳大寺家

24 15世紀以降、京都の公家の中には荘園領主の権益を守るために下国し、家領の直接経営に当たる者も多かった。山代荘忌浪郷では領家の（ ）流の園基富・基国父子が30年間にわたり在住して直務を行ったようである。

- ①藤原北家 ②藤原南家 ③村上源氏 ④桓武平氏

25 延徳3年（1491）、室町幕府の前管領（ ）・歌人冷泉為広等が、京から越後への往復に加賀を通過しているが、その行程が『為広越後下向日記』に詳細に記録されており、その内容から当時の北陸道の幹道が分かる。

- ① ほそかわまさもと細川政元 ② はたけやままさなが畠山政長 ③ し ぼよしかど斯波義廉 ④ ほそかわかつもと細川勝元

26 享禄の錯乱で、超勝寺一党に攻め込まれた山田光教寺では2世住持()を中心に、黒瀬覚道・福田ノ竹太夫・柴山・一針らの有力国人等が越前の朝倉氏の援軍を得て戦ったが敗れ、越前に亡命した。

- ① 顕誓 ② 蓮能 ③ 実玄 ④ 蓮淳

27 蓮如は、浄土真宗本願寺第7代法主存如の長庶子として出生。永禄3年(1431)天台衆の()において得度した。長禄元年(1457)本願寺第8世を継ぎ、布教活動で本願寺の教線を大きく拡大させた。

- ① 三千院 ② 滋賀院 ③ 曼殊院 ④ 青蓮院

28 大聖寺藩3代藩主前田利直は、2代藩主利明の3男で、元禄5年(1692)大聖寺藩を家督相続。宝永6年(1709)に藩邸北隅の大聖寺川に面して長流亭を建造したが、幕府の()として江戸城に登城しなければならず、ほとんど江戸に住んだ。

- ① 奥詰 ② 側用人 ③ 若年寄 ④ 老中

29 建武2年(1335)、鎌倉幕府の再興を図って中先代の乱が起こると、この反乱に北陸道で呼応した名越時兼なごしときかねの軍勢が上洛を目指して南下したが、大聖寺城に立て籠もる敷地しきじ伊豆守・()いずのかみ・上木平九郎うわぎへいくろう等の狩野一党と応援に赴いた越前の軍勢により殲滅せんめつされたという。

- ① 狩野義兼かのうよしかね ② 福田甚左衛門ふくだじんざえもん ③ 山岸新左衛門やまぎしんざえもん ④ 犬沢八兵衛いんのさわはちべい

30 永楽和全は京都の陶工で、慶応元年(1865)には大聖寺藩の要請を受けて来藩していたと考えられ、九谷本窯や()で窯業技術の指導を行う傍ら精力的に陶製を行い、停滞していた九谷焼に新しい息吹を与えた。

- ① 民山窯 ② 春日山窯 ③ 蓮台寺窯 ④ 小野窯

31 豊臣秀吉の家臣となった山口玄蕃宗永は、千利休に茶の湯を学び、()の年寄衆や毛利輝元・小早川隆景などとともに茶会を開き、能楽にも通ずる当時の文化人であった。

- ① 京都 ② 大坂 ③ 博多 ④ 堺

32 金沢城主前田利長は、慶長5年(1600)8月3日に大聖寺城主の山口玄蕃宗永親子やまぐちげんぼむねながを攻め滅ぼした。この大聖寺合戦で山口軍は、およそ()人の家臣が討ち死にした。

- ①500 ②600 ③700 ④800

33 大聖寺藩祖前田利治は、承応2年(1653)に藩財政が不足したため、筆頭家老の玉井市正貞直をはじめ、家臣()を加賀藩へ返還した。

- ①20人 ②22人 ③24人 ④26人

34 大聖寺藩祖前田利治は、万治3年(1660)4月21日に江戸で死去した。これに伴い、中沢久兵衛、小沢三郎兵衛、小栗権三郎じゅんし おいぼらの3人が殉死(追腹)したが、このうち小栗は5月2日に()で自害した。

- ①宗英寺 ②久法寺 ③全昌寺 ④寛慶寺

35 大聖寺藩では、加賀藩の御用絵師を務めた佐々木泉景をはじめ、小原文英・山口梅園・小島春晁などの絵師が活躍した。小原文英は狩野派を学んだのち、谷文晁から()を修得した。

- ①南画 ②写生画 ③文人画 ④洋画

36 大聖寺藩の十村には、組付十村と目付十村の2種があった。小塩辻村の鹿野小四郎、右村の堀野新四郎、保賀村の荒森宗左衛門、()の和田半助などは代々十村役を務めた。

- ①分校村 ②動橋村 ③弓波村 ④日末村

37 大聖寺藩では、荏油や菜種油とともに桐油や桐油が多く生産されました。油桐や桐は()村をはじめ、領内の村々でも栽培されるようになりました。

- ①勅使 ②日谷 ③庄 ④分校

38 大聖寺藩9代前田利之は、文政4年(1821)12月に加賀藩主12代()の願書により江戸幕府から10万石の待遇が公認された。

- ①前田重教まえだしげみち ②前田治脩まえだはるなが ③前田齊泰まえだなりやす ④前田齊広まえだなりなが

39 大聖寺藩では、天保元年（1830）頃まで伊切・浜佐美・篠原新の3か村で「塩手米制」という専売制により塩を製造した。塩釜数は3か村の中で伊切村が最も多く、江戸後期に（ ）あった。

- ①13 個 ②15 個 ③17 個 ④19 個

40 大聖寺藩の史学・地誌では、『芑憩紀聞』『藩国見聞録』『加賀江沼志稿』『秘要雑集』など多くの著書が編纂された。このうち『藩国見聞録』は、弘化2年（1845）に（ ）が著述した。

- ①塚谷沢右衛門 ②宮永嘉告 ③小塚秀得 ④奥村永世

41 柴山潟では大聖寺川と同様に川舟が往来し、その周囲には河道（舟着場）が設置されていた。遊行上人一行は、江戸期に（ ）領にあった「上人河道^{しょうにんこうどう}」を利用して実盛塚^{さねもりづか}を回向した。

- ①柴山村 ②篠原村 ③新保村 ④伊切村

42 伊能忠敬ら測量隊（ ）は、享和3年（1803）6月24日から27日まで大聖寺藩領の沿岸を測量し、大聖寺町の板屋や松屋、片野村の肝煎宅、橋立村の因随寺などに宿泊した。

- ①6 人 ②7 人 ③8 人 ④9 人

43 大聖寺西端の錦城山には、南北朝時代から元和元年（1615）まで数度に亘って大聖寺城が設置された。安土桃山時代には、（ ）の陪臣^{ばいしん}にあたる山口玄蕃宗永も大聖寺城の改修を行った。

- ①織田信長 ②豊臣秀吉 ③柴田勝家 ④丹羽長秀

44 大聖寺下屋敷から神明町までの一帯は、「山の下寺院群」と呼ばれ、実性院・蓮光寺・久法寺・全昌寺・正覚寺・宗寿寺・本光寺の7寺院と神明宮の1神社がある。宗寿寺は（ ）の寺院である。

- ①浄土宗 ②曹洞宗 ③日蓮宗 ④法華宗

45 大聖寺藩では、武士の鍛錬のために片野鴨池の周辺で鴨や雁などを捕る坂網猟が武士のみで行われた。そのため、江戸後期には、坂網を投げ上げる「坂場」が（ ）か所余もあった。

- ①630 ②650 ③670 ④690

46 江沼神社の境内端にある長流亭（川端御亭^{かわばたおちん}）は、宝永6年（1709）に3代前田利直の休憩所として家老（ ）によって建造されたといわれている。この建物は柿^{こけら}茸^{ぶき}の平屋で、小堀^{こぼり}遠州^{えんしゅう}の建築意匠^{けんちくいしょう}を採り入れている。

- ①村井主殿 ②山崎権丞 ③神谷内膳 ④佐分儀兵衛

47 加賀藩主3代前田利常夫人は、元和5年（1619）に敷地天神社に御神宝の蒔絵角赤手箱と御神楽代を寄進した。利常夫人は2代将軍徳川秀忠の（ ）珠姫のことで、法号を天徳院と称した。

- ①長女 ②二女 ③三女 ④四女

48 菅生石部神社の境内入り口には、三間一戸^{さんけんいっこ}の定型的な楼門^{ろうもん}（神門）がある。これは文政8年（1825）に（ ）の名工山上善右衛門嘉広^{よしひろ}の系統にあたる7代目善右衛門吉順^{よしのり}が設計したものである。

- ①四天王寺流 ②遠州流 ③大都流 ④建仁寺流

49 明治元年2月、大聖寺藩は官軍から弾薬・雷管（ ）発の調達を命じられ、その資金不足を補うために錦城山の麓で贗金造りをした。

- ① 5万 ② 10万 ③ 20万 ④ 30万

50 明治4年に起きた「みの虫一揆」において、農民たちは大聖寺藩に七か条の要求書をつきつけた。その主なる内容は、増税の見直しと（ ）の廃止であった。

- ①税務官設置 ②定免法 ③藩知事制 ④十村役

51 明治天皇の北陸巡幸は、明治 11 年 8 月 30 日に、総勢 798 人という空前の人数を従え東京を出発した。その後、富山、金沢を経て、大聖寺町に到着したのは（ ）6 日のことであった。

- ① 9 月 ② 10 月 ③ 11 月 ④ 12 月

52 明治期、大聖寺の大沢十次郎や（ ）の屋号をもつ井上商店は、山中漆器や九谷焼を海外に輸出するなどして郷土の地場産業振興に力を注いだ。

- ① 陶源 ② 吉田屋 ③ 大陶 ④ 角福

53 初代新家熊吉は、明治 32 年、漆器の販路開拓のために海外に渡航したが、旅先の（ ）で自転車を見て、木製リムの製造を思い立ったとされている。

- ① アメリカ ② ロンドン ③ ロシア ④ フランス

54 大聖寺博覧会は明治 12 年に、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校を会場に開催されたが、この事業は旧大聖寺藩の家老であった（ ）や権大参事の飛鳥井清が中心となって企画したものである。

- ① 佐分儀兵衛 ② 生駒一彦 ③ 稲垣 譲 ④ 前田 幹

55 片山津温泉の開湯は、明治 15 年に（ ）郡の観音堂村から招いた井戸掘りの森仁平が源泉掘削に成功したことに始まる。

- ① 羽咋 ② 鹿島 ③ 石川 ④ 河北

56 政府はGHQの指令に基づき、昭和 22 年に農地改革を実施した。これにより江沼郡でも、小作地が 23.2%あったものが、約（ ）%に減少した。

- ① 6 ② 8 ③ 10 ④ 12

57 加賀棒茶の製造で広く知られる動橋町の「株丸八製茶場」の社名は、丸谷家の初代（ ）の名に由来している。

- ① 八兵衛 ② 八左衛門 ③ 惣八 ④ 八衛門

58 現在の加賀九谷陶磁器協同組合は、明治15年、（ ）を会長として発足した江沼郡九谷陶画同盟会が前身となっている。

- ① 浅井一毫 ② 飛鳥井清 ③ 東方芝山 ④ 竹内吟秋

59 江沼郡では、明治13年頃までにおよそ40の小学校が設立された。これにより、その就学率も明治6年は（ ）%であったものが、明治10年には40%に上昇した。

- ① 8 ② 18 ③ 21 ④ 28

60 現在の加賀商工会議所の歴史は、昭和22年、新家熊吉が会頭となって発足した（ ）が起源となっている。

- ① 江沼商工会議所 ② 大聖寺商工会議所 ③ 江沼商工会 ④ 加賀商工会